

令和 7（2025）年度

学習院大学大学院 博士後期課程

人文科学研究科・教育学専攻

入学試験問題

9：00～10：00 外国語原書読解

10：20～12：20 論文

※太線わく内は必ず記入してください。

1

※太線わく内は必ず記入してください。

志望研究科	人文科学研究科 博士後期課程	志望専攻	教育学専攻	受験番号		カナ	
						氏 名	
試験科目	外国語原書読解（英語） 【試験時間】 9:00～10:00	備考	問題用紙 (2) 枚中 (2) 枚目			採点欄	
3. No matter how good a curriculum is developed, it has little meaning unless it is actually implemented. There are three types of educational curricula: the intended curriculum, the implemented curriculum, and the achieved curriculum. Policies need to be enacted to ensure that the intended curriculum is implemented and that the aim of that curriculum, student growth, is achieved. As a basis for implementing these policies, Japan has a system of educational laws governing these three types of curricula. The intended curriculum is developed by the school principal in accordance with the curriculum standards. The implemented curriculum is controlled by teachers who are responsible for using textbooks developed in accordance with the curriculum standards in their classes. The achieved curriculum is monitored by the use of student report cards that record the students' results for the year.							

※太線わく内は必ず記入してください。

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There is no handwriting or other markings on the paper.

※太線わく内は必ず記入してください。

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

※太線わく内は必ず記入してください。

志望研究科	人文科学研究科 博士後期課程	志望専攻	教育学専攻	受験番号	カナ	
					氏 名	
試験科目	外国語原書読解(日本語) 【試験時間】9:00~10:00	備考	問題用紙 (4) 枚中 (1) 枚目		採点欄	

問題 1 カタカナの部分の漢字に直しなさい。解答は解答用紙に 1 から 5 の番号を記して書きなさい。

- 1 フヘン不党を貫く
- 2 試合をサイカイする
- 3 身元をショウカイする
- 4 シュウチを集める
- 5 水がシンニュウする

問題 2 次の文章の内容を 20 行程度で要約しなさい。解答は解答用紙に書きなさい。

1 子どもの生活と学校

日本では、子どもは日中は学校にいるものである。学習塾やリトルリーグへの参加など、詳細に見れば学校が占める生活時間は縮小傾向にあるかも知れない。しかし、総じて子どもの生活の中心に学校があることは戦後以来長らく変わっていない。その中で、子どもの学校生活のありようを考える際に重要な視点となるのは、「集団との出会い方」であるといえよう。

集団づくり志向が強いことは、日本の学級経営の特徴として指摘されてきた。とはいえ、終戦直後の学校では「集団」が最も重要なキーワードであったわけではない。それまで使用していた教科書のほとんどを墨で塗りつぶし、何を新しい価値として学習すべきなのか大人も手探りの状態であったなかで、子どもたちが学校に通うことの意味は、大きく「生活」そのものと直結していた。

一九五〇年代に発表された生活綴方や問題解決学習の多くの実践は、子どもたち一人ひとりの生活現実を目を向け、これからの時代をどのように生きるか、そのために学校で何を学ぶかを考える学習であった。自身の生活を見つめるために、あるいは過酷な生活現実から逃れるために学校へ来ていた子どもも少なくなかったと思われる。

2 「集団」に出会う場としての学校

戦後の学校での教育は、まず子どもたちの生活と学習の一体化を理念として実践が再開された。やがてそれが「集団で学び」、「集団を学ぶ」ことへと関心の焦点を移していくことになる。それは、日本社会自体が経済生活の基盤として社会集団を再構築しようとしていたこととも関連していよう。

一九六〇～七〇年代には、全国生活指導研究協議会（全生研）が紹介する集団主義的学級経営論が多くの小・中学校で参照された。その形は、主として班長会と班活動を活用して、学級担任の指導のもとに自分たちでルールを決め、学級集団を管理し、秩序ある学級生活をめざすものである。

この学級経営論は、これからの日本社会を担う子どもたちに集団のよさだけでなく競争社会や序列社会の厳しさをも学ばせ、そうした社会で自らの位置を自覚し役割を果たす自律した社会人を育成することを意図していた。しかし、実践の流行とともにその理念は後退し、班を活用する形式のみが拡大

※太線わく内は必ず記入してください。

志望研究科	人文科学研究科 博士後期課程	志望専攻	教育学専攻	受験番号	カナ	
					氏 名	
試験科目	外国語原書読解(日本語) 【試験時間】 9:00~10:00	備考	問題用紙 (4) 枚中 (2) 枚目	採点欄		

し、その関心は班競争で成果を出せる団結力に焦点づけられていった。そこに出現した集団は、長いものに巻かれながらも、そうすることで助け合い、身の安全を守る運命共同体であった旧来の地域共同体をモデルとする集団であった。

いずれにしても、これらの集団主義的学級経営が浸透する学校では、子どもたちは学校に通うことで、厳しく競争し合う集団や、自らを抑圧しつつ適応しなければならぬ集団に出会い、そこでの生活から社会で生きていくすべを学んだのである。

3 制度に織り込まれた「集団」病理の表面化

以上のような集団を重視する学級のあり方は、常にその対極に個人の問題を抱えていた。七〇年代には、集団ありきの学級のもつ問題性を多くの教員が認識し、個を育てる学級経営実践が

模索されるようになっていく。にもかかわらず、八〇年代半ばには個々の教員の指導力の問題を超えて学校や学級という制度に織り込まれた集団病理ともいえる問題が表面化してきた。

たとえば、その一つの典型が子どもの自殺である。一九八五年、担任教諭から厳しく叱責された小学五年生が帰宅後に自殺するという事件が起こる。この事件では、学校教育に対する批判的な考えが文章で複数残されていたことが注目された。この時期に続いた少年少女の自殺事件は、学校教育が感受性豊かな子どもたちの個性を抑圧し、学校の価値観に反する考え方を阻害するあり方をしていくことの問題性を鋭く照射した。

こうした事件は、学校へ行けない子どもたちにも光を当てる契機となった。八〇年代には、非行や貧困等の理由からではなく、学校に行ける状況にありながら、登校時になると体調不良

になるような精神的症状を伴う不登校も社会的な問題となっていた。

もう一つ、集団のもつ病理的側面を社会問題として浮き彫りにしたのが、一九八六年のいじめ自殺事件である。この事件は、金品強要や教員も加わった「葬式ごっこ」など、いじめの残酷さだけでなく、いじめに気づいてもその空気を変えることの難しさを印象づけるものであった。集団のもつ圧力や凝集性がマイナスに作用した場合の怖さを実感する典型例である。いじめは時代とともにその性質を変えながらも、子どもの学校生活に付随する負の側面として現在も存在し続けている。

4 児童・生徒にとつての学校生活のリアリティ

一方で、当事者である子どもたちの生活世界に目を向けてみると、彼らなりの主体的な生活のしかた、集団との出会い方が見えてくる。たとえば、そ

※太線わく内は必ず記入してください。

志望研究科	人文科学研究科 博士後期課程	志望専攻	教育学専攻	受験番号	カナ	
					氏 名	
試験科目	外国語原書読解(日本語) 【試験時間】 9:00~10:00	備考	問題用紙 (4) 枚中 (3) 枚目		採点欄	

うした子どもたちの友人関係やコミュニケーションの様式は、(優しい関係)と表現されるようになった。

お互いに傷つけ合うことがないように、つかず離れずの距離を保ち、常に穏やかな空気が仲間内に流れるように細かい配慮をしながらコミュニケーションをとる。空気が読めないことを意味する「KY」は、このような集団関係の中から生まれた言葉である。

また、仲間集団の中に居場所を確保するために、他者とキャラクターがかわらないように考えながら慎重にキャラを演じているともいわれる。学校や学級内で所属している仲間集団のタイプによって発言力などが序列化される現象をいう「スクールカースト」や、一緒に食事をする友人がいなくなるときに、一人で食べるところを見られたくないのでトイレで食事をする「便所飯」など、特異な造語が青少年の間に浸透している。普通の子どもたちにとって

も、仲間集団に所属することの意味が大きく重くなっていることがうかがわれる。

5 「集団」病理に對抗する学校

子どもの学校生活は、一方で個人主義が拡大する社会の中で連帯することや協働することの重要性を学び、集団に所属することのよさを体験するものとして制度的に実践されてきた。体育祭や音楽祭での一体感などは、他では得がたい学校生活の記憶を形づくるものとなっている。しかし、反面では集団だからこそ生じる負の側面を内包し、子どもたちに自ずとこれに応じる適応力を要請するものとなってきた。

もちろん、学校や学級でも、集団が内包する病理に対して何もせずにはたわけではない。学級経営面では、七〇年代から個性尊重や受容と共感を基盤とする学級経営論が現れ、八〇年代にはカウンセリング・マインドや教育相

談、九〇年代以降にはキャリア教育の充実などが強調されながら、心の居場所としての学級のあり方が模索されてきた。九〇年代から配置活用が広がっていったスクールカウンセラーとの連携なども課題となっていた。

また、学校経営面では七〇年代の早い時期から、開かれた学校論や、学習集団編成の弾力化など、教室の「壁」を取り払い、学校や学級の制度的な硬直性をほぐす工夫が試みられてきた。複数の教員で指導に当たるティーム・ティーチングや、指導者を固定しない教科担任制、後には学級集団単位での生活を基本としない教科センター方式など、多様な教授組織のあり方が模索された。

学校・学級の硬直性をほぐす動きとして、もう一つ、九〇年代頃から各地で見られるようになってきたのは、縦割り班活動や、地域の人材に教育活動に参画してもらう教育連携などであ

※太線わく内は必ず記入してください。

志望研究科	人文科学研究科 博士後期課程	志望専攻	教育学専攻	受験番号	カナ	
					氏 名	
試験科目	外国語原書読解(日本語) 【試験時間】9:00~10:00	備考	問題用紙 (4) 枚中 (4) 枚目		採点欄	

る。これらは、固定した集団を一人の教員が担当するスタイルを弾力化し、子どもたちが学校生活の中で他学年の友だちと交流し、教員以外の多様な大人と接触する機会を拡大するものである。こうした実践の蓄積が、今日のコミュニティ・スクールや小中一貫教育、幼小連携活動などにつながっている。

6 次の課題としての「学級崩壊」

今日では、個を尊重しない集団が前提とされることはない。個人を抑圧したり阻害したりしない集団が善とされる。これは、普通学級での特別支援教育が重視され、インクルーシブ教育の実現がめざされていることとも符合している。しかし、子どもの学校生活の七〇年問を振り返るときにもう一つ触れておかなければならない現象がある。それは、二〇〇〇年前後にとくに話題となった「学級崩壊」である。

従来、学級や学校を舞台とする問題

は、多くが学校制度や教員の指導力に非がある問題として理解されてきた。しかし、学級崩壊を単純に教員の指導力低下現象としてとらえるだけでは不十分である。そうではなく以前は誰もが「学校に来たら集団と出会うものがある」と考えていたけれども、それが子どもたちにとってあたり前ではなくなったという事態として理解する必要がある。

学校や教員の努力の結果、子どもたちは自らの意志と選択によって集団との出会い方を選択できるようになってきた。折しも、背景には消費者意識の浸透やネットコミュニケーションの拡大によって自己決定を助長する社会状況があった。学級崩壊は、学級集団が出会う必要のある集団として子どもたちを選択されない、という事態だったと読み替えることができる。言い換え

たのである。

学校は、コミュニケーション力育成や心の教育に力を入れることで、切れかかっている子どもや保護者と学校との絆をつなぎ直すことに力を入れている。中一ギャップ解消や小一プロブレム対策の数々の方策によって、入り口段階からの学校適応支援を進めてきている。これらの方策は、超高齢化・少子化社会の地方創生文脈ともリンクしていつそう重要な意味をもつようになってきている。

共通して意識されているのは、集団の中で生きることの必要性やよさの再確認である。そこに、子どもたちが愛着をもち帰属すべき対象として「郷土」が措定されている。今日、学校ではこれらの価値を伝える働きかけが多様に試みられている。今後はさらに、当事者である子どもたちの主観的世界へ関心を向け、その変容を理解していくことが必要になるであろう。

※太線わく内は必ず記入してください。

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.